

潮見泰藏（編）

ビジュアル実践リハ 脳・神経系リハビリテーション カラー写真でわかるリハの根拠と手技のコツ

吉尾雅春

（千里リハビリテーション病院）



本書をひと言で紹介すると、脳・神経系リハビリテーションの根拠と手技のポイントをカラー写真でわかりやすくまとめた書籍である。近年、カラー印刷された書籍が多くなってきたが、これほどまでカラー写真を多用したものはない。カラー写真が多いのは無条件にうれしいものである。視覚的注意を引きつけてくれる。

本書は総論に始まり、第1章「脳疾患」、第2章「神経筋疾患」、第3章「小児神経疾患」、第4章「脊髄疾患」、第5章「末梢神経」、第6章「その他の神経疾患」、計365ページで構成されている。

総論では脳・神経疾患のリハビリテーションを進めていくうえで必要なそのとらえ方や診かた、障害モデルと共通する障害評価、効果判定とアウトカムについて解説している。さすがに手技のコツを伝授することを本書の目的の一つにしているだけあって、臨床家ならではのヒントが随所にみられる。例えば「感覚障害の境界域を探る試験などは障害領域から正常領域に向かい進める」というように、臨場感をもって具体的なヒントを提供している。

第1章「脳疾患」では脳卒中について病期別に62ページにわたって解説し、さらにくも膜下出血、多発性脳梗塞、頭部外傷、脳腫瘍、嚥下障害についてページを割いている。これらは大胆な項目立てではあるが、編者が日ごろ抱いている臨床における課題の重みづけの表れであろう。

本書はそれぞれの単元で「A. 知識の整理」と「B.

リハビリテーションプログラム」とに分けて解説している。図表を多用して文字通り知識の整理を促し、理解しやすい環境をつくっている。リハビリテーションプログラムでもその傾向は同様で、脳卒中急性期のリハビリテーションでは、開始基準や留意すべき点などが一覧として明示されている。それぞれの単元の冒頭には知識の整理のポイントがまとめられ、リハビリテーションプログラムの中ではすべきこと（Do!）とすべきではないこと（Don't!）が箇条書きされている。経験の浅いセラピストや学生にとって、とても親切な編集であり、その指導者あるいは教員にとっても相手の理解を導くうえでとても有用である。また、memoや注意書きが数多く目を引き、知識の整理やプログラムの実施に役立っている。

本書を開いてその特徴を以上のように受け止めたが、実は最も感銘を受けたのは総論の冒頭部分である。神経・筋疾患のリハビリテーションにおける対応、介入の考え方、アプローチの実践における総論としての記述は、本書、いや編者の真髓をみせていただいたと思えるほど、極めて重要なメッセージが並んでいる。ここまでまとめ上げることはなかなか難しいことである。この部分をしっかり読み取ったうえで、本書の各章に目を通してほしいと思った。

●B5判・365頁・4色刷

定価：5,985円（本体5,700円＋税）

2012年 羊土社刊